

# 聖書と音楽

前川金治

学校唱歌に広く使用されているドレミファソラシドの音階名は聖ヨハネ賛歌のラテン語六行詩各々の頭文字と、聖ヨハネの頭文字SとIの組合わせであると学ぶ時、聖書と音楽は不可分の関係にある事が周知のところである。

以下は昨年(1966年)イタリーのピサを振出しに、フロレンス、アッシジを経てローマを訪ね、太陽ハイウエを南下し、フェリーでギリシヤに渡り、トルコを始め、チグリスとユーフラテス河を越え、ダリヨスの本拠ペルシヤのベルセポリスまで1万キロをドライブし、親しく旧、新約聖書の地に学んだ、未整理な記録の一部です。

旧約聖書の中に音楽が戦闘時の武器として使用された例がいくつか記されているが、ヨルダン川を渡り、死海からエリコの町に来た時、期待していた、往時の壁あとを見る事が出来なかったが、『ヨシュア記』6章12節以下の記事に録されているラッパの音が今も聞えているようだった。今日、ニグロ・スピリチュアルの中に度々演奏される JERICO の源は此処にある。

翌朝ヨシュアは早く起き、祭司たちは主の箱をかき、7人の祭司たちは、雄羊の角のラッパ7本を携えて、主の箱に先立ち、絶えず、ラッパを吹き鳴らして進み、武装した者はこれに先立って行き、しんがりは主の箱に従った。ラッパは絶え間なく鳴りひびいた。その次の日にも、周囲を一度巡って宿営に帰った。6日の間そのようにした。

7日目には、夜明けに、早く起き、同じようにして、町を7度めぐった。町を7度めぐったのはこの日だけであった。(中略)そこで民は呼ばわり、祭司たちはラッパを吹き鳴らした。民はラッパの音を聞くと同時に、みな大声をあげて呼ばわったので、石がきはくずれ落ちた。そこで民はみな、すぐに上って町にはいり、町を攻め取った。(旧約聖書307~308頁)\*

ベタニアを経て、シオンの丘の上に立てられた聖都エルサレムに入城したのは、夕方6時を過ぎていた。その昔、ドイツのカイザルを歓迎するため建てられたイムペリアル・ホテルに投宿し、翌朝、さっそく、今は岩のモスクの境内になっている、神殿跡に立ちってみた。そして、王ソロモンが献堂したその式のすばらしさを P. Kerr の“MUSIC IN EVANGELISM”の中に、この献堂式には少くとも、専門の音楽家による4,000人の大合唱と大管絃楽団が参加した、と書いているのを思い出した。近来、世界的な大集会には、より多くの声と楽器を用いるようになったが、筆者が直接指揮し、実音として経験したのは1957年にニュー・ヨークのマデイソン・スクエア・ガーデンで開催されたビリー・グラハム博士のクルセードの1,000人の合唱と1961年に東京都立体育館で開催されたポップ・ピアース博士のクルセードの時の1,000人の大合唱である。

歴代志下5章12節以下(608頁) \*またレビびとの歌うたう者、すなわちアサフ、へ

マン、エドトンおよび彼らの子たちと兄弟たちはみな亜麻布を着、シンバルと、立琴と、琴をとって祭壇の東に立ち、120人の祭司は彼らと一緒に立ってラッパを吹いた。ラッパを吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した。そして彼らがラッパと、シンバルとその他の楽器をもって声をふりあげ、主をほめて『主は恵みあり、そのあわれみはとこしえに絶るこえとがない』と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。”

更に、王ダビデが組織した音楽団の詳細は『歴代志上』の25章の全体にわたっている。

紀元1世紀頃、ユダヤ人達が礼拝用に使用していたのは150篇からなる詩篇に単旋律をつけたものであった。後に、宗教改革の時、ジョン・カルビンがフランスの宮廷音楽家 CLEMENT MAROT と LOUIS BOURGEOIS の助を得て詩篇をパラフレーズし曲づけをしたのが1542年に出版された GENEVAN PSALTER である。

新約時代になって、簡単なメロディーによって斉唱されていたものに次のようなものがある。

ANNUNCIACION (ルカ1の30)

MAGNIFICAT (ルカ1の46~55)

BENEDICTUS (ルカ1の68~79)

GLORIA IN EXCELSIS (ルカ2:14)

NUNC DIMITTIS (ルカ2:29~32)

又、新約聖書中の『エペソ人への手紙5の19』、『コロサイ3の16』、『ヤコブ5の13』、『テモテ第1, 3の16』、『テモテ第2, 2の11~13』等。

エルサレムを後に、アンマンを経て、いよいよ、シリア沙漠に突入し、イラクのバグダッド目指して一路東進した。沙漠のほぼ中央、石油パイプ・ラインの第2番詰所がはるかに見える所に停車、夜営の用意をする。日没後も気温は余り下らず、32度(8月14日)、ローマで買い求めた、ベッドと寝袋役がに立った。

ヘブルの音楽に大きな影響を与えたシリアの曲が、幸い、賛美歌169番に、又ヘブライの曲が、同じく賛美歌85番に掲載されているので御一覽下さい。

今次旅行の大きな目的の一つであった、ペルシャ音楽、特に、聖書に関係をもつ教会音楽のペルシャ人作曲家の作品の多くを録音するのに絶大な協力を与えて下さった、テヘラン市のアルメニア教会 AV 技師 S. FUNG 博士に深甚の感謝を呈するとともに、日本人として始めて現地録音をしたこのテープを、この道の音楽愛好者に出来るだけ提供したいと願っている。

バビロンにネブカデネザル王を、ペルセポリスにダリヨス大王を偲んだ。彼らの文化は今、出土されつつある。物は変り世は移る、しかし、音楽は時間的芸術ながら、世界の人々の心を結ぶ、不思議な力をもっている。

(追記) イースタンブル(昔のコンスタンチノーブル)で昨年求める事が出来なかった、東方教会の音楽を尋ねて目下ソ連ウクライナ共和国の古都キエフへの途上です。